

## 宗教哲学骸骨ヲ読ム。

立花銚三郎稿。

徳永満之君近ゴロ宗教哲学骸骨ト題スル一書ヲ世ニ公ニセラル、是吾人ノ現今ニ於テ最珍重スベキ著作ノ一ナリ、何トナレバ坊間(註)頭ハルル所ノ書ハ実ニ充棟汗牛モ菅ナラズト雖モ、所謂書籍製造家ノ筆尖ニ出テザルハ甚少ク、徳永君ノ如ク利害得喪ノ外ニ超絶シ晦修自得ニ余念ナキ者ノ腔子ヨリ発シタルハ極メテ稀ナレバナリ。聞ク君ノ現ニ京都ニ在ルヤ、髪ヲ薙リ袈裟ヲ着ケ、弊屋ニ舍シ菜食ニ飽キ、調度素撲灑掃自ラ任シ、讀書念仏、心ヲ真理ニ托シ、躬ヲ修行ニ委ネ、時事政變嘗テ聞知セザルモノノ如シト。而シテ其年齒ヲ問ヘバ曰ク三十左右、其學歷ヲ問ヘバ曰ク文学士ト、其人想フベキナリ。

宗教哲学骸骨ハ眇然タル一小冊子ノミ、製本麤野、用紙粗悪、毫モ脩飾ヲ施サズ、正ニ其著者ノ性行ニ合ヘリ。若シ之ヲ坊間書肆ノ店頭ニ列ネシメバ、一顧スル者モナカルベシ。然レドモ書中ノ含藏スル所ハ高大精微ナル問題ニ係リ、且文字平穩ニシテ秩序乱レズ。其外形ノ貧ハ以テ俗眼ヲ惹クニ足ラザルモ、其内容ノ富ハ以テ識者ヲ動スニ足ルモノアラシ。

余ノ浅学無識ナル、此ノ如キ著作ニ容喙スルハ固ヨリ其分ニアラズト雖モ、嘗テ徳永君ニ從ツテ教ヲ奉スルノ縁アリ、且他ノ依嘱ノ已ムベカラザルモノアルヲ以テ、謏劣ヲ顧ミズ聊所感ノ要ヲ陳シテ君ノ叱正ヲ仰キ、併セテ江湖ニ質サント欲ス。唯憾ムラクハ匆忙ノ際ニ筆ヲ執リ推敲充分ナラズ、失言ノ譏極メテ免レ難キヲ知ル。

此書頁ヲ數フルコト一百、分チテ六章トス、一ニ宗教ト學問、二ニ有限無限、三ニ靈魂論、四ニ轉化論、五ニ善惡論、六ニ安心修徳是ナリ。而シテ余ヲ以テ其全体ヲ見レバ、西洋大家ノ哲理ヲ斟酌セラレタルモノナキニアラザレドモ、専ラ仏陀宗教ノ旨趣ヲ發揮セラレタルモノナルガ如シ。其用語ノ如キモ多クハ仏典ニ出テ、他ノ宗教ニ出テタルモノナシ。間々他ノ宗教ニ適合スル所アルモ、偶然ニ出テテ著者ノ故意ニ基ケルニハアラザルガ如シ。要スルニ其行論ノ起点ハ仏教ニ在リテ、地平圈稍狹隘ノ嫌ヲ免レザルガ如シ。

然レドモ吾人ノ最遺憾トスベキハ、問題ノ極メテ重大ナルニ拘ハラズ説明ノ割合ニ短簡ナルニ在リ。サレバ一路直説ノ妙ニ富メドモ、盈科漸進ノ完ニ薄シ。是固ヨリ骸骨ノ骸骨タル所以ナルベシト雖モ、或ハ読者ヲシテ疑惑ヲ免レザラシムルモノアラン。余ハ左ニ各章ニ付キ卑見ヲ陳セント欲ス、蓋亦著者ノ本意ニ達セサルニ坐スルモノ少カラザルベシ。

一。著者ハ先ツ道理心ト宗教心トノ別ヲ説キ、道理ハ信仰ヲ前定セサルヲ得ス、信仰ハ道理ニ整理セラレ、二者別ニシテ而カモ相調和スベキ所以ヲ述ヘラレタリ。説キ得テ甚明瞭ナルニ似タリ。然レドモ亦少ク考フベキモノアリ。道理心ト宗教心トハ性質上相背反シテ容易ニ調和スルコトヲ得ザル点モ亦少カラザルベシ。蓋道理心ハ推究ノ要件トシテ疑問ヲ要シ、宗教心ハ安心ノ本義ヨリ確信ヲ要ス。一ハ安ンセザルコトヲ尚ビ、他ハ安ンズルコトヲ尚ブ。一ハ運動ニ傾キ、他ハ靜定ニ傾ク。一ハ發達ヲ期シ、他ハ凝固ヲ期ス。一ハ冷胆ヲ旨トシ、他ハ熱心ヲ旨トス。一ハ寧ロ假定トシテ事物ヲ信セント欲シ、他ハ正ニ不易トシテ信仰ヲ奉セント欲ス。其間多少ノ徑庭ナキヲ得ズ。而シテ今日事實ノ大勢ハ理学ニ傾ケル心ニ宗教ノ信仰日ニ薄弱トナルノ傾向ヲ示スモノノ如シ。然ラバ此二者ノ關係ヲ論斷シ、其区域ヲ認定スルハ蓋容易ノ業ニアラズ。要スルニ知識論ヲ解釈シタル後ニアラザレバ此問題ハ決定シ難キ所アラン。

二。有限無限ノ論ハ全書ノ骨髓ヲ成セルモノナリト謂フベキ歟。其論緒ハ既ニ開卷第一章ニ起リ、其脈絡ハ巻尾ノ最終節ニ至リテ始メテ終レリ。而シテ著者ノ解説ハ形式上及ヒ名目上ニ於テ頗ル懋メラレタルモノノ如シ。然レトモ内包的意義ニ至リテハ余輩未タ瞭々タラザルモノアリ。蓋著者ノ茲ニ説カルル所ニ拠レバ、無限ト有限トノ關係ハ全体ト部分

トノ關係ナルガ如シ。若シ名目説ヲシテ之ヲ評セシメバ、無限ノ實在ト否トハ一問題ナルベシ。然レドモ余輩ハ名目説ヲ奉ズル者ニアラザレバ、姑ク無限ヲ以テ實在ト假定セシニ。其實在ノ無限ハ果シテ何如ナル価値ヲ有シ、何如ナル意義ヲ備フルカ、吾人ガ之ヲ知り若クハ之ヲ定ムルハ何如ナル方法ト能力トニ由ルカ。是大ニ説明ヲ望ム所ナリ。且無限ガ一体ノ有機組織タル所以ハ万物万化ノ各箇ガ他ノ一切ト別離ス可ラザル關係ヲ有シ、即チ主伴互具ノ義理ヲ具フルニ由ルナリ。然ラバ余ハ問ハント欲ス、此物化ノ關係ハ何如ニシテ生セシカ、何如ナル事情ニ随ツテ起レルカ。近世ノ哲学ニ於テ議論囂シキ空間、時間、主觀、客觀ノ問題ハ茲ニ之ヲ默過シテ可ナリトセン乎。

無限ハ実ニ外ニ依ルモノナカルベキモ、内ニ依ルモノナキコト能ハザルベシ、即チ全体トシテハ部分ニ依ラザルコト能ハザルベシ。此意味ニ於テハ無限ハ依立ナリト云フモ可ナラン歟。且ツ物化ハ變化シテ已マザルモノナリ、然ラバ物化ノ全体タル無限モ變化セザルヲ得ザルモノノ如シ。而シテ無限ニ變化アリ、即チ進化若クハ退化アリトセバ、無限ヲ指シテ必シモ絶對唯一完全等ト称スルコトヲ得サルニ似タリ。

若シ無限ヲ以テ単ニ有限ノ全体ナリト為ストキハ、上ノ如キ結果ハ免レ難カルベシ。然レドモ顧フニ吾人ハ一ト多トヲ離レ、全体ト部分トヲ離レ、完全ト不完全トヲ離レタル如キ絶對平等常住不變ノ無限ヲ想像シ能ハザルカ、即チ現象(部分并ニ全体)ニ対スル実體ヲ想像シ能ハザルカ。此ノ如ク無限ヲ解釈スルヲ得バ吾人ノ困難ハ稍減殺スルニ庶幾カルベシ。而シテ「カント」ノ真境、「シヨベンハウエル」ノ意志、「ヘーゲル」ノ絶對、「スペンセル」ノ不可知、「ハルトマン」ノ不識等ハ其当否何如ハ之ヲ措キテ、皆此種ノ無限ニ属スルモノノ如シ。聞ク、仏教ニモ又真如ヲ説キ、而シテ真如ニ不變義ノ真如ト隨緣義ノ真如トノ二ヲ分ツト。然ラバ其一義ニ從ヘバ、真如モ亦茲ニ説キタル無限ニハアラザルカ。而シテ此書ノ著者ガ余輩ノ為ニ之ガ説明ノ勞ヲ取ラレザリシハ蓋偶然ニ出ツヘシト雖モ、亦余輩讀者ノ遺憾トスル所ナリ。

第二章ニ於テ猶余ガ教ヲ乞ハント欲スルハ、有限ガ無限ニ対向スルテフ一事ナリ。対向トハ単ニ対望ト云フノミナラズ、

進向ノ義ヲ含メルモノノ如シ。然ラバ有限ノ箇々物々ガ無限ニ進向スルトハ何事ヲカ称スル。箇物ガ自性ヲ開展スルヲ謂フカ、將タ有限ガ某作用ニ由リテ無限ニ入体スルヲ謂フカ。第一説ノ如クンバ箇物ノ組織性質ハ如何。「ライブニツツ」ノ元子論ニ於ケルガ如ク、箇物ハ其中心ニ世界ノ全体即チ所謂無限ヲ反照スルノ性ヲ有シ、其昭明ノ度ハ次第ニ進昇スルコトヲ得ルモノナルカ。抑又他ノ同効ナル説明法アルカ。若シ又第二説ノ如クンバ、前ニ一個ノ有限ハ無限ト同体タル能ハズト明言セラレタルニ背クガ如シ。要スルニ二説共ニ特別ノ説明ヲ要スベシ。而シテ著者ハ実ニ第四章ノ結尾ニ於テ其説明ヲ試ミラレタリ、然レドモ未タ詳悉ナラザルヲ患フ、且ツ不幸ニモ有限無限ノ關係ヲ以テ不可思議ナリト言了セラレタリ。是余カ泣岐ノ嘆ナキ能ハザル所以ナリ。

三。靈魂論ニ於テ著者ガ草木国土悉皆成仏ノ理ヲ容易ニモ括孤<sup>(孤)</sup>中ニ說過セラレタルハ惜ムベシトス。精神説ノ立不立ハ未タ容易ニ決シ得ベカラザルモノアリ、且ツ万有同ク精神アリトスルモ其完全ノ度ニ階級アリトセバ是又一ノ要論トセザルベカラザレバナリ

靈魂ニ就イテ有形、無形、自覚ノ三説ヲ挙ケ第三説ニ論決セラレタルハ、余ノ喜ンデ其真理ナランコトヲ希望スル所ナリ。唯無形説ヲ排シテ自覚説ヲ立セラレタル証明ハ「ロツツエ」氏ノ証明ト同一ナルガ如シト雖モ、未タ充分満足ナラザルガ如シ。數箇ノ精微ナル物質カ互ニ作用ヲ及ボシ一種特別ナル共同ノ活動ヲ生センコトハ、必シモ不能ニハ屬セザルベシ。二力ノ合果ヲ生スルニハ船舶ノ如キ一体アルヲ要スルノ喩説ハ、此ノ如キ精緻ノ場合ニ於テハ生粗ニ失スルナキヤヲ疑フナリ。且著者若シ有限ノ全体ガ絶対唯一ナル無限ノ一体ヲ成シ得ルコトヲ信セラレシカ。物質の合果ノ論モ其類ニアラザル歟。余ヲ以テ見レハ靈魂實在ノ問題ハ此方面ヨリ近クベカラズシテ、他ノ恰合<sup>(恰合)</sup>ナル方面ヲ扱<sup>(扱)</sup>ンデ攻ムルニ若カザルナリ。

次章ニ述ヘラレタル転化ノ基本ハ「カント」氏ノ常在性ノ原則ニ髣髴タルモノアリ。然レドモ余ハ以為ラク、転化ノ基本タルニハ結果トシテ生シタル者ニテモ毫モ不可ナルコトナク唯一タビ生シタル後ハ其滅ニ至ルマデ常在ナルヲ要スル

ノミト。然ラバ是亦必シモ靈魂ノ實在ヲ証明スル所以ニアラザルベキ歟。敢テ教ヲ乞ハズンバアラザルナリ。

四。転化論ハ有限無限ノ論ニ次キテ全書中最注意スベキ一章ナルガ如シ。其社会ノ進化、生物ノ進化的ト云フガ如キハ正当ノ表白ニアラズ、巴ムナクンバ傍系ノ進化的ト名ケテ正系ノ進化的ト區別スベシト説カレタルハ、近時ノ理学社会ヲ驚動スルニ足り、人ヲシテ遠ク「ライブニッツ」氏ノ元子論ニ於ケル精神進化ノ鋭ヲ追憶セシメズンバアラズ。蓋社会ノ進化的トイヒ生物ノ進化的トイフモ種族或ハ社会ノ概念ノ見解ニヨリテハ必シモ不可ナキニ似タリト雖モ、著者ノ如キ勇断ナル表白ハ吾人ノ最モ快トセザルヲ得ザル所ナリ。

茲ニ余ノ疑フ所ハ、著者ハ其所謂正系進化的ニ於テ過去現在未来ヲ説キ、隠然靈魂ノ不滅ヲ認定セラレタルモノノ如シ。余ヲ以テ見レバ靈魂不滅ハ靈魂實在ノ証明ヨリ直ニ生スル推論ニハアラズ。何トナレバ吾人ハ其實在物ノ生滅変化如何ヲ未タ推度シ能ハザレバナリ。蓋著者ハ仏教ニ有リフレタル転生相統論ヲ仮定セラレタルナルベシト雖モ、余ハ其論証ト細説トヲ渴望スル者ナリ。

因縁果ニ関スル仏教ノ説明ハ精微ヲ極メタリト称スベシ、「ミル」氏ガ原因ハ必ス二箇以上ヨリ成立スト云ヘルモ我ニ於テ毫モ新奇トスルニ足ラズ。唯茲ニ著者ガ「ヘーゲル」ノ三段軌範ヲ担出シ正反合ヲ主客会ニ打換シテ仏教ノ式ニ附会セント試ミラレタルハ、無益ノ業ナリト信ズ。「ヘーゲル」ノ三段軌範ハ以テ世界ノ継続的開展ヲ説明スル所ニシテ、因縁時ヲ同ウシテ説クベキ者ト趣ヲ異ニセルニ似タリ。

因果ノ法則ガ相對界ニノミ適用スベクシテ絶対界ニ適用スベカラズトハ、是正ニ「シヨベンハウエル」ノ意見ニ同シ。独リ茲ニ疑フベキハ、著者ハ嚮ニ第一章ニ於テ有限ハ無限ヲ以テ或ハ因性トシ或ハ以テ果体トスト述ヘラレタリ、之ニ抛レバ有限無限ノ間ニ全ク因果ノ連鎖ヲ絶タザルニ似タリ。此間何等ノ橋梁カ其虧隙ヲ接続スル。

此章ノ末節ニ於テハ著者ノ所謂無限ハ既ニ唯有限ノ全体ヲ指スニアラザルヲ見ル。「各有限ガ実ハ無限ノモノタルナリ」ノ一語以テ証スベシ。吾人ハ益始メヨリ其精確ナル説明ヲ得ザリシヲ惜ム。

五。善悪論ハ極メテ明快ナリ、然レドモ通説再考スレバ吾人為ニ得タル所ハ形式ノ壮大ニ止リ、實質ノ恩恵ヲ蒙ラザルナリ。曰ク幸福、曰ク良心、曰ク神意、曰ク道理、此等善悪ノ標準ハ紛々相争ヒ而カモ各満足ナラザルモノアラン、乃チ之ヲ一斉ニ打破シ去リ、高ク確定ノ標準ヲ掲ケテ曰ク、有限ノ無限ニ向フハ進化ニシテ善ナリ之ニ背クハ退化ニシテ悪ナリト。何ソ其レ言ノ壮ナルヤ。然レドモ顧ミレバ、無限ノ認メ難ク、定メ難ク、悟リ難ク、達シ難キハ幸福、良心、神意、道理等ノ者ニ孰レゾ。曰ク、幸福等ノモノハ各種類アレドモ無限ハ曾テ種類アラズ以テ採択スル所ヲ知ルベシト。余ハ之ヲ然リトスルコト能ハズ。茲ニ盲人アリ、一枝ノ杖ニ依リテ俛々トシテ行ケリ、慈者アリ之ヲ憫ミテ謂ヘラク、杖ハ以テ荆棘ニ陥リ易シ余与フルニ更ニ安全ナル者ヲ以テセント、則チ杖ヲ奪ヒ明赫々タル灯火ヲ以テ代ヘテ之ニ与フ。知ラズ盲人果シテ喜フヤ否ヤ。今著者ノ善悪ノ標準ヲ論セラルル或ハ之ニ類スルナキ歟。

著者ハ猶進ンデ善悪ニ大小高下ノ質量アルコトヲ論セラル。然レドモ吾人ハ其所謂標準ニ從ツテ之ヲ測定スル實際ノ方法ヲ知ラザルヲ何如ンセン。且、著者ハ諸説通会ノ一節ニ於テ幸福、良心、神意、道理等ハ以テ標準ト呼ブベカラザルモ、標準ヲ認知スル種類トスヘキヲ論セラレタリ。標準カ、標準認知ノ種類カ、吾人ハ必シモ其名ニ拘セザルナリ。唯其実如何ヲ顧ミルノミ。著者ノ業ハ豈ニ階次ヲ毀チテ壇ニ上リ之ヲ下ラントスルニ及ンデ更ニ階次ヲ修メシムルノ所為ニ近キノ嫌ナキカ。

六。最後ノ安心修徳ノ一章ハ蓋前五章ノ合果トモ称スベク、前五章ヲ満足ニ了解シ来ラバ此章ノ趣味ハ自ラ胸裏ニ溢レン。著者ガ以テ全書ノ結尾ニ充テラレタル固ヨリ偶然ニアラザルベシ。唯成道楽土等ノ玄妙ハ宗教ニ得ル所アル者ニアラザレバ蓋違ニ知覚シ能ハザルモノアリ。故ニ余ハ茲ニ妄評ヲ挿ミテ君子ヲ累スガ如キコトヲ為サザルベシ。

以上ハ宗教哲学骸骨ヲ批評セリト云ハンヨリハ、寧ロ此書ニ関シテ生シタル余ノ疑問ヲ布陳シタルノミト云フヲ適當トス。意馳セ筆乱ル、言ノ或ハ礼ヲ失スルモノアラバ、君子幸ニ之ヲ恕セヨ。若シ夫レ、此書ノ真正ナル価値ニ至リテハ、豈ニ区々ノ論弁ノ能ク易フルコトヲ得ル所ナランヤ。